

## 今日の説教のポイント <創世記 11 章 1～9 節>

福島原発事故が起こった今こそ、バベルの塔の物語が分かる時。

### ①一人の人間の罪から集団としての人間の罪へ

まず、バベルの塔の物語は創世記が最初から追い続けている人間の罪の継続性を考えていることを押さえておかなければなりません。3章で描かれたアダムとエバの罪の姿はノアの洪水を経ても変わっていません(8:21)。そして今、その人間が集団になって犯す罪が問われているのです。集まり、協力し合って、神になろうとする罪が。

### ②神になろうとする罪が科学技術に現われた場合

「石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用い」(3)、「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」(4)とする。これは、まさに、今もなされている科学技術の開発と応用の業の始まりです！ 何が問題なのでしょう？ 神様から与えられた知恵を用いて、神の領域まで入って神に肩を並べようとするのです！

### ③一致団結することが必ずしも正しいとは言えない理由

「一つになる、協力する」、これらは普通「良いこと」と考えられています。しかし、人間が誤ったことに向かって一致協力する時、事態の悪化は加速します。かつて戦争に向かって行った時の日本がそうです。このバベルの塔の建設でも、自分の思いに任せてこのまま工事を続ければ、大崩壊が起こって多くの犠牲者が出ていたかもしれません。6節の「このようなことをし始めたのだ」は、「これは彼らの行いの始まりに過ぎない」とも訳せます。神様の介入は、人間が被る被害をくい止めて下さるための恵みの行為であったと見るべきではないでしょうか！

### ④言葉を混乱させ、散らされたことの中に見る神様の恵み

一つにさせるのとは逆向きに思われる神様の行為。これは神様の嫌がらせ？ 否！ 全体主義国家の恐さ、収穫効率だけ考えた「緑の革命」で生まれた品種激減の中で起こった問題、大発電遠隔地送電に代わる各地での多様な発電方法による小発電地元消費の正当性など、聖書が語る「ばらばら（混乱させ、散らされ）」の持つ恵みの意味は、福島事故後の今、とてもよく分かるのではないのでしょうか！